

闇の中に、男と女の姿が浮かび上がる。

カシオ 先生、時計を合わせましょう。

先生 (腕時計を見て) 現在の時刻は、午後四時四十八分五十五秒、五十六秒、

五十七秒――

カシオ (腕時計を見て) よし、合ってる。いいですか、先生？ ヒデの到着時間は五時ジャストです。だから、先生はその十秒後に――

先生 わかっていますよ。全部、覚えましたから。

カシオ 俺が言いたいのは、時間通りに行動しろってこと。つまりいて転ぶとか、ちよつとおトイレとか、絶対に禁止です。

先生 行きませんよ、おトイレなんか。

カシオ うまく行けば、五分で終わる。くれぐれも落ち着いて。  
先生 そちらこそ。

カシオと先生が去る。

別の場所に、ヒデトシがやってくる。周囲を見回す。そこへ、ヌカダがやってくる。

ヌカダ 君、ここは立入禁止だよ。

ヒデトシ

ヌカダ

え？ そうなの？  
社会科学見学の小学生だね？ 一人で勝手な行動をしちゃ、駄目じゃないか。  
それとも、迷子になったのかな？

ヒデトシ

（ヌカダの持つ機械を指さして）それは？

ヌカダ

おっと。（と機械を背中に隠して）これはとっても大切な機械なんだ。子供に触らせるわけには行かない。

ヒデトシ

おじさん、出口はどこ？

ヌカダ

やっぱり迷子か。出口はあっちだよ。（と背後を指さす）

ヒデトシ

（ヌカダの手から機械を奪う）

ヌカダ

あ、こら！

ヒデトシが扉に走る。扉が開き、ヒデトシが中に飛び込む。ヌカダが後を追って飛び込み、ヒデトシをつかむ。扉が閉まる。爆風の音。

別の場所に先生がやってくる。配電盤のパネルを開ける。

先生

（腕時計を見て）午後四時五十九分五十八秒、五十九秒、午後五時！

扉が開き、ヒデトシとヌカダが飛び出す。ヒデトシが転ぶ。ヌカダがヒデトシをつかむ。

先生

（腕時計を見て）八秒、九秒、十秒！

先生がスイッチを押す。真っ暗になる。

ヌカダ

ん？

ヒデトシ

(ヌカダを突き飛ばし、走り出す)

ヌカダ

おい、待て！

ヒデトシが走り去る。後を追って、ヌカダが走り去る。

先生

さてと、次は――

そこへ、懐中電灯を持った男が走ってくる。

ヤマベ

(先生に懐中電灯を当てて) 電源を落としたのはおまえか！

先生

おら、なんもしてねえだ。

先生が走り去る。後を追って、ヤマベも走り去る。

別の場所に、ヒデトシが走ってくる。反対側から、懐中電灯を持った男がやってくる。すれ違った直後、男が振り返る。

ヤマノウエ

待ちたまえ。

ヒデトシ

(立ち止まる)

ヤマノウエ

(ヒデトシに懐中電灯を当てて) 君は誰だ。ここで何をしている。

ヒデトシ

(振り返らない)

ヤマノウエ

なぜ答えない。まさか、勝手に入ってきたのか？

ヤマノウエがヒデトシの腕をつかむ。ヒデトシがその手を振り払って、走り出す。と、目の前に、ヌカダが飛び出す。

ヌカダ  
ふう、やっと追いついた。

ヤマノウエ  
(ヌカダに懐中電灯を当てて) 君はヌカダくんじゃないか。しかし、その

制服は十年以上前の――

ヌカダ  
事情は後で説明します。(ヒデトシに) マシンをよこせ。

ヒデトシ  
(手に持っていた機械のボタンを押そうとする)

ヌカダ  
やめろ。ここで押したら、死ぬぞ。

ヒデトシ  
(手を止める)

ヌカダ  
マシンを作動させると、半径三メートルの範囲で爆風が起こる。こんな狭

い場所で爆風が起きたら、壁が崩れて、僕はペチャンコだ。僕を殺したく

なかつたら、マシンをよこせ。

ヒデトシ  
(手に持っていた機械のボタンを押そうとする)

ヌカダ  
やめろ！ 殺さないでくれ！

ヌカダの背後から、カシオが飛び出す。ヌカダを突き飛ばし、ヒデトシに駆け寄る。

カシオ  
ちよつと借りるよ。(ヒデトシの手から機械を取る)

ヒデトシ  
あ、返せ！

カシオ  
(機械をヌカダに向けて) 動くな。動くと、最大出力で作動させるぞ。

ヤマノウエ  
やめろ！ そんなことをしたら、このビルは――

カシオ  
先生！

ヤマノウエの背後から、先生が飛び出す。

先生 はい！

カシオ 遅い！ どこで道草を食ってたんです。

先生 途中で迷子になっちゃって。

カシオ いいから、こいつを連れて、外へ出てください。

先生 (ヒデトシの手を握って) 行こう。

ヒデトシ ……母さん？

先生 いやだ。私がそんな年に見える？ さあ。

先生・ヒデトシが走り去る。カシオも後を追おうとする。そこへ、ヤマベが飛び出す。

ヤマベ 局長、これは一体――

ヤマノウエ 侵入者だ！ 捕まえろ！

又カダがカシオに飛びかかる。カシオがかわす。ヤマノウエとヤマベがカシオにつかみかかる。カシオがかわす。又カダがカシオを羽交い締めにする。ヤマベがカシオに殴りかかる。カシオが避ける。ヤマベの拳は又カダに当たる。

ヤマベ あ、ごめん……。

カシオが走り去る。後を追って、ヤマノウエ・ヤマベ・又カダも走り去る。

別の場所に、カシオが走ってくる。反対側から、先生・ヒデトシがやってくる。

先生  
カシオ  
遅い！　どこで道草を食ってたんです。  
いいから、車に乗ってください。

カシオ・先生・ヒデトシが車に乗る。カシオが車を発進させる。

先生  
カシオ  
やったあ！　作戦成功ですね。

先生  
カシオ  
まあ、こうなることはわかってましたけどね。

ヒデトシ  
カシオ  
（ヒデトシに）うわー、汗びっしょり。ハンカチで拭いたら？  
持っていない。

先生  
ヒデトシ  
（先生に）こいつは忘れっぽいですよ。ハンカチなんか、しょっちゅう

忘れてたし。おかげで、ポケットはいつも空っぽ。  
（ヒデトシにハンカチを渡して）ポケットにハンカチ。紳士のたしなみよ。

先生  
ヒデトシ  
（おでこを拭いて、返す）

先生  
ヒデトシ  
洗って返すのも、紳士のたしなみよ。

先生  
ヒデトシ  
（カシオに手を差し出して）返せよ、それ。

先生  
ヒデトシ  
その前に、何か言うことがあるんじゃないか？

先生  
ヒデトシ  
え？  
助けてもらったんだから、ありがたうって言わなくちゃ。

先生  
ヒデトシ  
そんなの、まだわからない。このまま誘拐されるのかもしれないし。

先生  
ヒデトシ  
安心しろ。この車は、おまえの行きたかった所へ向かってる。俺の家だ。

先生  
ヒデトシ  
俺の？

カシオ  
ヒデトシ  
カシオ  
ヒデトシ  
先生  
カシオ  
ヒデトシ

俺の名前は柿本カシオ。どうだ、驚いたか？  
別に。  
嘘つけ。俺が迎えに来るとは思ってたか。さあ、今度はおまえが名乗る番だ。  
僕の名前はナカタヒデトシ。  
(吹き出す)  
やっぱり、その名前か。まあ、いい。ヒデ、ようこそ二〇三五年へ。(とヒデトシに右手を差し出す)  
(カシオの右手を弾く)

カシオ・先生・ヒデトシがやってくる。

カシオ 　　ただいま。

反対側から、スギエ・クリコがやってくる。

スギエ・クリコ お帰りなさい！

カシオ やっぱり来てやがった。

スギエ 来てやがった、とは何よ。ここは私の家なのよ。いつ来たって、文句を言

われる筋合いはないわ。

カシオ でも、新婚一カ月で里帰りはまずいだらう。

スギエ ウチの旦那様は世界一優しいの。「一晩泊まってきてもいい？」って聞い

たら、「淋しいけど我慢する」って言ってくれた。

クリコ はいはい、のろけ話はいいから。お兄ちゃん、紹介してよ。

カシオ そうだな。姉さん、クリコ、この子が十六年前からやってきた、ナカタヒ

でトシくんだ。

クリコ (ヒデトシに) ナカタヒデトシ？

ヒデトシ (頷く)

スギエ・クリコ・先生 (笑う)





ヒデトシ

スギエ

ヒデトシ

スギエ

カシオ

スギエ

カシオ

先生

先生・ヒデトシが去る。

クリコ

スギエ

クリコ

スギエ

クリコ

スギエ

クリコ

旅行に出かけてて。  
旅行？

去年、お父さんが定年退職してね。退職の記念に、世界一周旅行に行ったの。今頃はリオデジャネイロ辺りかな。

母さんも一緒に？

もちろんよ。ウチのお父さんは世界で二番目の愛妻家だもの。お母さんを置いていくわけないわ。ちなみに、世界一はウチの旦那様よ。

(ヒデトシに) 追いかけてっことで、疲れただろう。夕食の時間まで、俺の部屋で休めよ。

(ヒデトシに) あなたの好きなもの、たくさん作るからね。期待しててよ。先生、お願いします。

ヒデトシくん、行こうか。

お姉ちゃん、今のは何？

今のって？

お母さんは世界一周旅行に行った？ どうしてそんな嘘をついたのよ。

だって、いきなり本当のことを言ったら、傷つくと思ったから。

それは仕方ないことじゃない。

わかっている。でも、今夜はあの子と楽しく食事がしたかったのよ。明日の朝になったら、私の口から言うから。

そうやって、先延ばしにするのは良くないと思う。私、あの子に言ってく

カシオ　　る。  
待てよ、クリコ。姉さんがしたことは間違っていない。十六年前の姉さんも、

スギエ　　やっぱり嘘をついたんだ。

カシオ　　そうなの？

クリコ　　あの時は確か、「四国八十八カ所巡り」だったかな。

カシオ　　そんな嘘、よく信じたね。

クリコ　　信じるもんか。すぐに嘘だって見抜いたよ。

カシオ　　じゃ、ヒデトシくんも？

クリコ　　もちろん、見抜いてるさ。でも、それでいいんだ。嘘の中身は変わったけ

スギエ　　ど、それ以外は変わってない。

クリコ　　つまり、歴史改変は起きてないってこと？

カシオ　　ああ。

スギエ　　良かった。じゃ、食事の支度を始めるね。クリコ、手伝って。

スギエ・クリコが去る。

カシオ　　ところが、そうは行かないんだ。

カシオが去る。

別の場所に、ヒデトシがやってくる。後から、先生が望遠鏡を持って、やってくる。

先生  
ヒデトシ

ヒデトシくん、星に興味はある？  
ない。

先生

ヒデトシ

先生

ヒデトシ

先生

ヒデトシ

先生

ヒデトシ

先生

ヒデトシ

先生

ヒデトシ

やっぱり。でも、もう少し大きくなったら、興味を持つと思うよ。この望遠鏡、覗いてみない？

いいよ。

（空を見上げて）うわー、カシオペアがあんなにキレイに見える。よし、望遠鏡で拡大してみよう。（と望遠鏡を覗く）  
バカみたい。

（歌う）「カシオピア、もう水仙が咲き出すぞ、おまえのガラスの水車、きつきと回せ」

その歌、どうして知ってるの？

カシオくんから聞いたのよ。なかなかいい歌よね。

あんたに歌の良さがわかるの？

バカにしないでよ。私、こう見えても、音楽の先生なのよ。

へえ、理科の先生かと思ってた。

星が好きになったのも、カシオくんの影響。そうだ。カシオくんから聞いたんだけどね、カシオペアっていうのは、古代エチオピア王国の王妃の名前なんだって。

王妃って、王様の奥さん？

そう、ケフェウス王のお妃様。とってもキレイ人でね、いつもこう言って、威張ってたんだって。「海に住むネレイドの五十人の姉妹も、私の美しさには叶うまい」。それを聞いた海の神ポセイドンは、怒り狂って、お化け鯨を暴れさせた。困ったケフェウス王は、娘のアンドロメダを海岸の岩に鎖でつないで、生贄にした。そこへ通りかかったのが、天馬ペガサスに乗った勇士ペルセウス。ねえ、聞いてる？

ヒデトシ  
先生

(望遠鏡を覗きながら) ペルセウス。  
そうそう。で、そのペルセウスは、たった今、退治してきたメドゥーサの首を、お化け鯨に突きつけた。メドゥーサの目を見た者は、すべて石になる。お化け鯨も石になり、見事、ペルセウスはアンドロメダを救い出した。ねえ、ホントに聞いてる？

ヒデトシ

聞いてるってば!

先生

カシオって名前はね、カシオペアからつけたんだって。

ヒデトシ

えー? そんなイヤな女の名前から? どうせなら、ペルセウスからつけてほしかったな。

先生

ペルセとか?

ヒデトシ

∴ やつぱり、カシオの方がいいや。

先生

(笑って) でも、なかなかロマンチックな話でしょう? 良かったら、入れておいて。あなたのポケットに。 良かったら、入

そこへ、カシオがやってくる。

カシオ

もうすぐ食事ができるぞ。今日のおかずは、ハンバーグと春巻と栗きんと

先生

うわー、和洋中バラバラ。

カシオ

全部、俺の好物なんです。ヒデも好きだろう?

ヒデトシ

やつぱり、知ってるんだな?

カシオ

何が。

ヒデトシ

僕の本当の名前だよ。

カシオ  
ヒデトシ  
カシオ

先生

ヒデトシ  
カシオ  
ヒデトシ  
カシオ  
ヒデトシ

そこへ、クリコがやってくる。

クリコ

飛鳥小学校六年一組、黒板係の柿本カシオ。おまえは十六年前の俺だ。いつ気がついた？ 僕の顔を見た時？ バカ。俺はおまえなんだぞ。おまえが今日の午後五時ジャストにタイムトラベルしてくることは、十六年前から知ってた。だって、俺も十六年前に同じことをしたんだから。

(ヒデトシに) だから、迎えに行ったのよ。こっちのカシオくんがタイムトラベルした時も、大人のカシオくんが迎えに来てくれたんだって。

(カシオに) 仕事は何をしてるの？

研究者だよ。HALっていう研究所に勤めてる。

医者じゃないの？ 僕は将来、医者になるって決めたんだ。母さんが入院した時。

そうだったな。

母さんは、本当に旅行に行ってるの？

ああ、その話はまた明日にしよう。

お兄ちゃん、ニュースプラネットが始まるよ。

一組の男女が並んで立っている。

二人

こんばんは。

アリマ

ニュースプラネットの時間です。

タカスギ

政治経済、科学に教育、国際問題からご近所の噂話まで、ホットな話題を冷めないうちにお届けします。

アリマ

司会は私、アリマヨウコと――

タカスギ

タカスギシンイチです。

アリマ

最後まで、ごゆっくりお楽しみください。

二人が頭を下げる。

アリマ

さて、最初のニュースは、私についてですね。

タカスギ

そうなんです。実は今から三十年前の今日、アリマさんはこの番組のレギュラーになったんです。つまり、今日はアリマさんの三十周年の記念日というわけです。

アリマ

すみません。私事をトップニュースにしちゃって。

タカスギ

(アリマに花束を差し出して) おめでとうございます、アリマさん。

アリマ

(受け取って) ありがとうございます。これ、スタッフのみんなから？

タカスギ

いいえ、番組が始まる前に届いたんです。このカードと一緒に。(とカードを取り出して読む)「三十周年おめでとう。これからも毎晩見るからね。トビー・マクガイア」

アリマ

ありがとう、トビー。あなたも『スパイダーマン 32』、頑張ってたね。

タカスギ

アリマさんは、最初の頃はキャスターじゃなくて、レポーターだったんですよね？

アリマ

そうですね。最初の仕事は、世田谷区の飛鳥高校のレポートでした。そこ音楽部の生徒さんが、卒業式で奈良時代の歌を歌ったんです。我ながら、見事なレポートでした。

タカスギ

では、次のニュースへ行きましょうか。

アリマ

え？ もう？

アリマ

本日午後六時、六本木の時間管理局で、ヤマノウエ局長が記者会見を行い、タイムトラベル法違反事件が発生したと発表しました。

タカスギ

発表によりますと、事件が起きたのは本日午後五時頃、何者かが別の時代からタイムトラベルしてきて、局員一名に怪我を負わせ、建物の外に逃走した模様です。

別の場所に、

キドがやってくる。

キド

はい。私が今、来ていますのは、六本木にあります、時間管理局です。

アリマ

時間局から、その後、何か発表はありましたか？

キド

いいえ。詳細がわかり次第、二回目の会見を行うとのことでしたが、まだ



その動きはありません。それでは、一時間ほど前に行われました、一回目の会見の模様をご覧ください。

別の場所に、ヤマノウエがやってくる。

ヤマノウエ

逃走したのは、十二歳から十五歳ぐらいの少年で、身長は一五五センチか

記者の声

ら一六〇センチぐらい、頭に野球帽をかぶっていました。少年は局員に怪我を負わせたんですかよね？　ということは、武器か何か

ヤマノウエ

携帯していたんですか？　携帯していったんですか？　いいえ。ただ、少年の逃走を手助けした者がおりまして。

記者の声

共犯者がいたんですか？　一人、何者です。男が一人に、女が一人。この二人も逃走したので、正体は不明です。

記者の声

少年は一人でタイムトラベルしてきましたんですか？　それとも、共犯の男女と三人で？

ヤマノウエ

一人です。ただし、元の時代の随行員も一緒でした。少年は随行員の持つ

記者の声

ていたマシンを操作して、強引にタイムトラベルしたんです。そんなことができませんか？

ヤマノウエ

近年は例がありませんが、以前は何度も起きていました。少年は十六年前の三月から来たようですが、その頃は年に数回、発生していました。ちよつと待ってください！

ヤマノウエが去る。

アリマ  
キド

キドさん、その少年は過去から来たんですか？  
そうなんです。タイムトラベル法では、未来へのタイムトラベルが厳重に  
禁止されています。過去へは研究者が行けますが、未来へは誰も行けません。

タカスギ  
アリマ

なぜ未来は駄目なんですか？  
それは、私が説明しましょう。たとえば、タカスギくんが一年後の未来へ  
行ったとします。するとそこでは、タカスギくんのお葬式が行われていた  
んです。

タカスギ  
アリマ

僕は死んでたんですか？  
ええ。死因はお酒の飲み過ぎでした。さあ、元の時代へ戻ったら、タカス  
ギくんはどうするでしょう？

タカスギ  
アリマ

とっても落ち込むと思います。  
そうですね、落ち込みますね。で、その後は？

タカスギ  
アリマ

私の答えを待っていました。もし未来が気に入らなかつたら、現在を変え  
ればいい。それも一つの歴史変更です。が、この歴史変更は防ぐことがで  
きない。お酒をやめるのは、タカスギくんの自由ですから。

タカスギ  
アリマ

わかりましたよ。やめればいんでしょう、やめれば。  
このように、未来へのタイムトラベルは、歴史変更を起こす危険性が非常  
に高いんです。そうですね、キドさん？

キド

アリマさんの仰る通りです。少年がしたことはタイムトラベル法に反する  
行為であり、きわめて重大な犯罪だと言えます。

別の場所で、カシオ・スギエがテレビを見ている。

スギエ

カシオ

スギエ

カシオ

スギエ

カスオ

重大な犯罪か。本当は今すぐ、時間局へ連れていくべきなのよね。それは違う。十六年前の姉さんはそんなことしなかった。わかっている。あんたが経験した通りのことを、あの子に経験させる。それが、歴史改変を防ぐことになるんでしょ？

そういうこと。

でも、やっぱりかわいそう。お母さんのことを知ったら、あの子、きっと傷つくわ。

大丈夫だよ。あいつの覚悟はできてる。母さんは死ぬかもしれない。いや、きっと死ぬ。そう思ったから、ここへ来たんだ。

そこへ、クリコがやってくる。

クリコ

スギエ

クリコ

スギエ

カシオ

スギエ

カシオ

お兄ちゃん、ヒデトシくんがいないよ。

またベランダじゃないの？ 先生と星を見てるんじゃない？

ベランダにもいなかった。先生も。

カシオ、探しに行こう。

その必要はない。ヒデの行き先はわかってる。

どこへ行ったのよ。

(テレビを指さして) あそこだよ。アリマさんに会いに行ったんだ。

先生・ヒデトシ・アリマがやってくる。

アリマ

驚いたわ。あなたが私に会いに来るなんて。

先生

私は付き添いです。アリマさんに会いに来たのは、この子なんです。

アリマ

誰よ、この子。待って。当ててみせるから。

先生

どうぞ。

アリマ

あなたが連れてきたんだから、カシオくんの知り合いであることは間違いな

ヒデトシ

いわね。わかった。カシオくんの親戚。

アリマ

正解です。やっぱりね。君の顔、子供の頃のカシオくんによく似てるもの。名前は？

ヒデトシ

柿本ヒデトシです。

アリマ

ヒデトシくん、ニュースキャスターって、とっても忙しいの。放送が終わっ

ヒデトシ

ても、明日の分の打ち合わせとかしなくちゃいけないし。はっきり言って、

アリマ

子供の相手をしてる暇はないのよ。

ヒデトシ

今日の夕方、時間管理局で起きた事件について、有力な情報を提供するって

アリマ

言ったら？

ヒデトシ

よく会いに来てくれたわね。そのテイルームで、チョコレートパフェで

ヒデトシ

も食べる？

アリマ

パフェのかわりに、聞きたいことがあります。

アリマ

私にも情報を提供しろってわけ？

私に取引をもちかけるなんて、大した度

胸ね。で、君の聞きたいことは？

柿本光介は今、どこにいますか？

カシオくんのお父さん？ そんなの、この人に聞けばいいじゃない。

で、答えは？

ベルリンよ。

ベルリン？ リオデジャネイロじゃないんですか？

柿本さんはね、去年、うちの会社を定年退職して、すぐに留学したの。あの人、昔からドイツオペラが好きでね。定年を期に、一から勉強したいって。

じゃ、母さんも一緒に？

どういうこと？

だから、はるかさんも一緒に行つたんですか、ベルリンへ。

（先生に）ねえ、この子、本当にカシオくんの親戚？

……ええ。

だったら、どうして知らないのよ。はるかさんが亡くなったこと。

亡くなった？ 母さんは死んだんですか？

そこへ、カシオがやってくる。

カシオ

ヒデトシ、迎えに来たぞ。

アリマ

カシオくん！ てことは、この子はやっぱり、カシオくんの親戚？

カシオ

そうです。仕事中心にお邪魔して、申し訳ありませんでした。

アリマ

それは別に構わないけど、この子、ちよつと変よ。はるかさんが亡くなった

カシオ　こと、知らないんだもの。  
親戚は親戚でも、ほとんど他人で言っているぐらいの遠縁なんです。だから、  
今まで全然付き合いがなくて。

先生　（ヒデトシに）さあ、帰りましょう。

アリマ　（ヒデトシに）ちよつと待ってよ。あなたの情報はまだ受け取ってないわ。  
情報？

アリマ　（ヒデトシに）時間管理局で起きた事件について、有力な情報を提供するっ  
て言ったでしょう？

カシオ　子供の話を真に受けなくてください。こいつがそんなこと、できるわけない  
でしょう。

アリマ　（ヒデトシに）そうなの？　君は私を騙したの？

そこへ、キドがやってくる。

キド　アリマさん、ただいま帰りました。

アリマ　早かったわね。時間局の監視ビデオは？

キド　（ビデオケースを示して）これです。すぐに編集にしますから。

アリマ　ちよつと待って、私も行くから。カシオくん、私はあなたが生まれた時から  
あなたを知ってる。あなたが生まれた次の日に病院に行つて、新生児室の中  
のあなたを見た。二十歳になるまで、毎年お年玉もあげた。

カシオ　アリマさんには本当に感謝しています。  
アリマ　だったら、本当のことを言つて。その子は、本当にあなたの親戚？

ヒデトシが走り去る。

カシオ　　おい、ヒデ！（アリマに）失礼します。

カシオ・先生が走り去る。

キド　　今の人、柿本カシオさんですよ？

アリマ　　知ってるの？

キド　　ええ、私の友達のお兄さんなんです。子供の頃からカッコよくて、友達の家

に行くのが楽しみでした。

アリマ　　もしかして、初恋の人？

キド　　いやだ、違いますよ！でも、カシオさんて、最近、有名ですよ。ほら、

去年、H A Lのレポートをしたでしょう？その時、取材した人たちがみん

な言っていました。今、H A Lで最も優秀な研究者は、柿本カシオだろうって。

アリマ　　キドさん、逃走した少年を手助けしたのは、男と女の二人組よね？

キド　　それがあの二人？まさか、カシオさんがそんなこと。

アリマ　　（キドの手からビデオケースを取って）これを見れば、答えが出る。編集室

へ行こう。

アリマ・キドが去る。

別の場所に、ヒデトシがやってくる。後を追って、カシオ・先生がやってくる。カシオがヒデトシの腕をつかむ。

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

待てよ、ヒデ。

(カシオの手を振り払って) 放せよ。

嘘をついて、悪かった。でも、明日になったら、ちゃんと言おうと思ってたんだ。

あんたは十六年前に、僕と同じことをした。そうだろう？

ああ。

あんたも、アリマさんに会いに行ったのか？

行った。ニュースプラネットを見て、この人に聞けば、本当のことがわかる

と思つて。

じゃ、僕が黙つて家を出ることも知つてたんだな？

でも、途中で何があるか、わからないからな。先生と一緒に行ってもらった。

(ヒデトシに) 事故に遇ったら、大変だからね。

(カシオに) アリマさんから聞いたよ。母さんは死んだつて。

そうか。

僕がアリマさんから聞くつてことも、最初から知つてたんだらう？

ああ。

あんたはずるい。明日、言おうと思つてたなんて、嘘じゃないか。自分が言

いたくないから、アリマさんに言わせたんじゃないか。

そうじゃない。俺は歴史を変えたくなかつただけだ。もしアリマさんが言わ

なかつたら、俺が言うつもりだった。

母さんはいつ死んだんだ。

十六年前の四月。おまえがタイムトラベルした日から、一カ月後だ。

一カ月？ 父さんはまだ半年は大丈夫だらうつて。



カシオ  
ヒデトシ

それが信じられなかったから、タイムトラベルしてきたんだろ？  
（カシオの胸ぐらをつかんで）嘘つきだ！ 父さんもあんな姉さんもクリ  
コモ、みんな嘘つきだ！

ヒデトシがカシオを突き飛ばして、うつむく。

先生

ごめんね、カシオくん。

ヤマノウエ・ヌカダがやってくる。ヌカダは頭に包帯を巻いている。

ヌカダ 驚きました。ヤマノウエさんが局長になってるなんて。

ヤマノウエ 十六年前は、まだ課長代理だったかな？

ヌカダ そうです。僕たち随行員がミスをするたびに、一緒に課長の所へ行って、頭

を下げてくれて。なんて優しい人だろう、でも、きっと出世はしないだろう

ヤマノウエ と思つてたのに。カメの歩みはのろい。しかし、最後はウサギに勝つんだよ。

ヌカダ 今回の事件でも、また一緒に頭を下げてもらうことになると思ひます。本当

ヤマノウエ に申し訳ありません。

ヌカダ そのことなんだがな、私には記憶がないんだ。十六年前に、君が未来へ行つ

たという記憶が。

ヌカダ それはつまり、私が今回の事件を隠蔽したということですか？ でも、そん

なことは不可能です。タイムトラベルの記録はマシンに自動的に残るんです

から。

ヤマノウエ しかし、それ以外にどんな可能性がある。

ヌカダ 共犯者がやったのかもしれない。

ヤマノウエ 共犯者？ 少年の逃亡を手助けた二人か？

ヌカダ いや、それはないでしょう。彼らのこの時代の人間ですから。

ヤマノウエ　すると、君はこう言いたいのか？　十六年前にも、共犯者がいたと。  
ヌカダ　ええ。

そこへ、ヤマベがやってくる。

ヤマベ　局長、お電話です。（と受話器を差し出す）

ヤマノウエ　（受け取って）誰からだ。

ヤマベ　ニュースプラネットのアリマさんて仰ってました。

ヤマノウエ　アリマヨウコさん？　俺、ファンなんだよ。（とボタンを押して、受話器に）  
もしもし、局長のヤマノウエです。

別の場所に、受話器を持ったアリマがやってくる。ヤマベは去る。

アリマ　突然お電話して、申し訳ありません。ニュースプラネットのアリマヨウコで

す。はじめまして。

ヤマノウエ　初めてじゃありません。あなたのことは、三十年前からずっと見てました。

アリマ　でも、こうしてお話するのは初めてですよ？

ヤマノウエ　そう言えば。

アリマ　私のご存知でしたら、話が早いわ。実は折入って、ヤマノウエさんに

お願いがあるんです。ヤマノウエさんと、十六年前からやってきた随行員の

方に、直接インタビューをさせていただきたいんです。

ヤマノウエ　インタビューですか？　しかし、話でしたら、記者会見でしてますが。

アリマ　私どもの番組では、今回の事件について、特集を組みたいと考えています。

ヤマノウエ  
そのためには、ぜひとも単独でのインタビューが必要なんです。  
しかし。

アリマ  
今回の事件について、有力な情報を提供するって言ったなら？

ヤマノウエ  
今すぐ、こちらに来てください。

又カダ  
しかし、もうすぐ二回目の記者会見が始まります。

ヤマノウエ  
（受話器を手で押さえて）会見が終わった後だったら、いくらでも時間があ  
るじゃないか。

アリマ  
もしもし？ ヤマノウエさん？

ヤマノウエ  
それで、アリマさんが提供してくださる情報というのは？

アリマ  
それは直接、お会いした時に。

そこへ、男がやってきて、ヤマノウエの手から受話器を奪う。

課長  
（受話器に）申し訳ないが、インタビューはお断りします。

ヤマノウエ  
君、いきなり何をするんだ。

又カダ  
課長！

ヤマノウエ  
課長？

アリマ  
あなたは誰です。ヤマノウエさんは快く引き受けてくださいましたよ。

課長  
それはあなたの聞き間違いでしょう。それでは、これで。（とボタンを押す）

アリマ  
ちよっと！ 待ってください！

アリマが受話器を睨みつけ、去る。

又カダ  
ヤマノウエ

ヤマノウエさん、紹介します。こちらが私の上司で、随行課課長の――いや、紹介はいい。この人のことは、私もよく存じ上げている。何しろ、私の上司だったんだから。

課長  
ヤマノウエ

まさか、君が局長になつてゐるとはな。

私の前の局長はあなたですよ。結局、カメはウサギに追いつけなかつたんです。

又カダ

（課長に）いつこちらにいらつしやつたんですか？

課長

たつた今だ。

又カダ

私が来たのは午後五時ちようど。今から四時間前です。

課長

そんなことはわかつてる。で、犯人は？

又カダ

まだ捕まつてません。それどころか、いまだに名前も判明してなくて。

課長

犯人の名前は柿本カシオ。年齢は十二歳。今はおそらく、杉並区の柿本光介

又カダ

宅に潜伏している。

課長

どうしてそんなことまで？

ヤマノウエ

向こうを出発する前に調べてきたんだ。じゃ、すぐに逮捕に向かうとしよう。

課長

逮捕は警察に任せられた方が。

ヤマノウエ

これ以上、この時代の人間に迷惑はかけたくない。十六年前の人間がしでか

課長

したことは、十六年前の人間が片付ける。

ヤマノウエ

しかし。

ヤマノウエ

ヤマノウエくん、後のことは僕に任せてくれ。

ヤマノウエ

わかりましたよ、サルマルさん。

カシオ・先生・ヒデトシがやってくる。

カシオ　　ただいま。

反対側から、スギエ・クリコがやってくる。

スギエ・クリコ　お帰りなさい！

カシオ　　姉さん、食事は？　まさか、先に食ってないだろうな？

スギエ　　そんなことするわけないでしょう？　ヒデトシくんに食べてもらうために作

ヒデトシ　　嘘つき。

ヒデトシが去る。

スギエ　　何よ、嘘つきって。

先生　　アリマさんから聞いたんです。お母さんが亡くなったこと。

スギエが去る。後を追って、先生が去る。

クリコ お姉ちゃん！  
カシオ クリコ、食事に行こう。  
クリコ ヒデトシくんはどうするのよ。  
カシオ あいつは食わないよ。俺も十六年前は食わなかったんだ。招かれざる客のせい。  
クリコ 客？  
カシオ あと一時間ぐらいで来るはずだ。だから、急いで食わないと。クリコ、頼む。

カシオ・クリコが去る。  
別の場所に、ヒデトシが望遠鏡を持って、やってくる。後を追って、先生・スギエがやってくる。

スギエ ヒデトシくん。  
ヒデトシ 僕はおなか为空いてない。だから、ここで星を見てるよ。  
先生 じゃ、私もそうしようかな。  
ヒデトシ いいから、一人にしてくれよ。みんな、向こうへ行ってくれ。(と望遠鏡を覗く)  
スギエ わかった。あなたの言う通りにする。でも、その前に、一言だけ言わせて。  
先生 ヒデトシくん、スギエさんの話を聞いてあげて。  
スギエ (ヒデトシに) 私たちのお母さんは十六年前に亡くなった。でも、あなたのお母さんはまだ亡くなってない。大切なのはこれからのよ。  
先生 これから？  
スギエ 今でも覚えてる。十六年前、カシオが未来から帰ってきた時。何だか急に明

るくなつてね。家にいる時も、お母さんのお見舞いに行つた時も、冗談ばかり言うようになって。カシオのおかげで、どんなに助けられたか、わからないわ。

先生  
スギエ

そうだったんですか。  
お母さんも、きつと喜んでたと思う。自分の命が長くないことは知ってたみたいだから。

先生  
スギエ

お医者さんから、告知されたんですか？  
たぶんね。(ヒデトシに) お母さんは、スキルス性ガンっていう病気だね。

ヒデトシ  
スギエ

入院した時には、もう手の施しようがなかったの。  
それは十六年前の話だろう？ 今の医学なら、治せるかもしれない。  
そう思ったから、ここへ来たんでしよう？ でも、無理なのよ。ガンの特効薬はいまだに発見されてない。お母さんを助ける方法はないの。

ヒデトシ  
スギエ

嘘だ。  
今度は嘘じゃない。十六年前、カシオは何も持たずに帰ってきた。それなのに、一生懸命明るく振る舞つて。あなたにも同じことができる？ お母さんのために。

先生  
ヒデトシ

どう？ ヒデトシくん。  
ペルセウスはアンドロメダを助けたんだよね？

先生  
ヒデトシ

そうよ。お化け鯨にメドゥーサの首を突きつけて。  
神話なんて嘘っぱちだ。誰かが誰かを助けるなんて、現実の世界にはあり得ないんだ。

チャイムの音。カシオ・クリコがやってくる。



クリコ 招かれざる客？  
カシオ ああ。二階へ行つて、先生に知らせてくれ。  
クリコ なんて言えばいいのよ。  
カシオ 逃げろつて言えばわかる。早く。

クリコが去る。

カシオ (ボタンを押して) どちら様ですか？  
ヌカダの声 時間管理局のヌカダと申します。こちらに、柿本カシオくんが来てますよね？  
カシオ 柿本カシオは僕ですが。  
ヌカダの声 あなたじゃなくて、子供の方のカシオくんです。十六年前からやってきた。  
カシオ いや、僕は十六年前からここに住んでますけど。  
ヌカダの声 いいから、早く開けてください。  
カシオ はいはい。

扉が開く。 課長・ヌカダが入ってくる。

カシオ 時間管理局の方が、僕に何の用です。  
課長 (カシオに紙を突き付けて) 柿本カシオの逮捕状だ。時間管理局は、タイム  
トラベル法違反者に対して、逮捕権を付与されている。速やかに身柄を引き  
渡してもらいたい。  
カシオ そう言われても、僕には何のことだか。

課長 (ヌカダに) 探せ。

ヌカダが走り去る。

課長 君には刑法違反の容疑がかかっている。不法侵入と障害と犯人隠匿。まあ、

カシオ 逮捕するのは警察の仕事だがな。

課長 覚悟はできてますよ、サルマルさん。

カシオ 私の名前を知ってるのか。

課長 ええ。

カシオ とすると、私と君の母親の間に何があったかも知ってるんだな？

課長 三十年前、あなたは随行員の立場を利用して、過去改変を行った。母の過去

カシオ を改変して、父から母を奪った。

課長 結局、奪い返されたがな。君の父親には、痛い目に遇わされた。しかし、今

度はその行かない。

チャイムの音。

カシオ またお客さんだ。もう十時を過ぎてるのに。(とボタンを押して) どちら様

キドの声 ですか？

カシオ その声はカシオさんですね？ 私、クリコちゃんの友達の、キドです。

課長 (課長に) 妹の友達です。中へ入れていいですよね？

カシオ 駄目だ。追い返せ。

カシオ 帰れって言っても、帰らないんじゃないかな。彼女の目的はヒデだから。

そこへ、ヌカダが戻ってくる。後から、スギエ・クリコもやってくる。

ヌカダ 課長、柿本カシオはいませんでした。ベランダから庭へ下りてようです。  
課長 (カシオに) 我々が来ることは、前からわかっていたわけか。行こう、ヌカ

ダくん。

扉が開く。キドがマイクを持って、立っている。

キド あ、あなた、時間管理局の方ですね？ 今回の事件について、お聞きしたい

ヌカダ ノーコメント。  
キド あ、ちよつと待って！

課長・ヌカダが去る。

キド (カシオに) カシオくんはもうここにはいないんですね？

カシオ あれ？ クリコに会いに来たんじゃなかったの？

キド ごめんなさい、カシオさん。私は十六年前のあなたに会いに来たんです。

カシオ つまり、君はニュースプラネットのレポーターとして来たわけだ。

キド 知ってるんですか、私のこと？

カシオ もちろんだよ。小学校の頃から、何度も顔を見てるし。

クリコ カツラ、あの子のことはそつとしておいてあげて。

キド  
クリコ

悪いけど、それはできない。これは仕事なんだから。確かに、あの子のしたことは悪いことだと思う。でも、あの子はあの子なりに必死なのよ。

キド

わかっているよ、クリコ。でも、私だって、この仕事、必死でやっているの。カシオさん、こんな時になんですけど、あなたに言いたいことがあります。

カシオ

言いたいこと？  
好きでした。話をするのは今日が初めてだけど、ずっとずっと好きでした。

キドが去る。

クリコ  
スギエ  
カシオ  
クリコ  
カシオ  
クリコ

仕事中に何やっているのよ！

(カシオに) いいの、追いかけてなくて？

こっちは行き先がわかってるんだ。慌てなくても、途中で追い抜けるよ。

今度の行き先は？

クリコは覚えてるか？ 十六年前にお世話になった、オオトモ先生。

もちろんよ。あの顔は一度見たら忘れない。

ヒデトシ・先生が走ってくる。タクシーに乗る。

ヌカダ・課長が走ってくる。時間管理局の車に乗る。

キドが走ってくる。タクシーに乗る。

カシオ・スギエ・クリコが走ってくる。カシオの車に乗る。

ヌカダ

課長、ヤマノウエさんに電話しておきますか？

課長

したかったら、君がしろ。

ヌカダ

でも、私は今、運転中です。

課長

じゃ、するな。

キドが携帯電話をかける。

キド

もしもし、アリマさん？

アリマの声

キドさんね？ 今、どこ？

キド

時間局の人間が乗った車を追跡中です。時間局の人間は、柿本カシオの逃

亡先へ向かっているようです。

アリマの声

つまり、あなたは車で移動中なのね？ 実は私もなのよ。

アリマ・タカスギがテレビ局の車でやってくる。

アリマ

それで、所在地はわかる？

キド

高円寺です。環七を北へ向かってます。

アリマ

環七を北へ？ タカスギくん、カーナビで調べて。

タカスギ

はあ……。

アリマ

どうしたの？ 元気がないわね。

タカスギ

アリマさんの話を聞いたら、カシオって子がかわいそうになっちゃって。

アリマ

何言ってるの。あの子がしてることは、重大な犯罪なのよ。

タカスギ

男の子はね、時々、無性に暴れたくなることもあるんですよ。実は僕も小

学生の際に――

アリマ

（カーナビを調べながら）悪いけど、静かにしてください？

タカスギ

はい。

アリマ

わかった、板橋よ。キドさん、あの子は平和堂大学の付属病院へ行くつも

キド

りなのよ。

アリマ

今、なんて言いました？ 病院？

アリマ

十六年前、はるかさんが入院してた病院よ。

アリマ・タカスギが去る。

スギエ

カシオ、もつとスピードを出して。

カシオ

はいはい。俺は一人で行くつもりだったのに。

スギエ

そう言わないで。私だって、あの子が心配なのよ。

クリコ

私たちの顔を見たら、怒るだろうね。

スギエ 仕方ないわよ。最初に嘘をついたのは私なんだから。  
カシオ そうじゃない。あいつが怒ってるのは、別のことだよ。

クリコ 別のこと？  
カシオ 俺も姉さんもクリコも、平気な顔で暮らしてる。母さんがいないのに、誰も悲しそうじゃない。

クリコ だって、あれから十七年も経ったのよ。  
カシオ おまえはどうだった。母さんが死んだ時、また笑える日が来ると思ったか？

ヌカダが携帯電話を出す。

ヌカダ 課長、ヤマノウエさんからです。  
課長 切れ。

ヌカダが携帯電話を切る。

スギエ あの病院へ行くのは久しぶりね。

クリコ 十六年前はバスで行ったよね。  
スギエ そうそう。毎日三人で通ったのよ。少しでも、お母さんと一緒にいたくて。

クリコ お姉ちゃんには料理の作り方を教えてもらって。  
カシオ カシオは学校の宿題を手伝ってもらって。

クリコ クリコは歌を歌ってもらって。  
カシオ 覚えてる？ お母さんが最後に私たちに言ったこと。

カシオ ありがとう、だろ？

クリコ

育ててくれたのはお母さんなのに。でも、私はうれしかった。さよならつて言われるより、百万倍うれしかったのよ。

ヒデトシ・先生がタクシーから降りて、走り去る。

ヌカダ・課長が車から降りて、走り去る。

カシオ・スギエ・クリコが降りて、走り去る。

キド

え？ 前のタクシーを見失った？ そんなあ。じゃ、この近くに病院はないですか？ 名前は確か……。窓の外を見て）あ！ 今の建物、病院でしたよね？ 聖イグナチオ病院？ ええ、確か、そんな名前でした。停めてください！ 降ります！

キドがタクシーから降りて、走り去る。

別の場所に、オオトモ教授・アリマ・タカスギがやってくる。タカスギはビデオカメラを持っていて。

アリマ

オオトモ先生、オオトモ先生ですよ？

オオトモ教授

あなた方は？

アリマ

ニューズプラネットのアリマと申します。

タカスギ

（オオトモ教授に）同じく、タカスギです。

オオトモ教授

ああ、確かにタカスギくん。私は君のファンなんだよ。先輩のしごきに

タカスギ

負けないで、頑張りましたよ。



アリマ

（オオトモ教授に）付かぬ事をお聞きしますが、こちらに柿本カシオという少年は来ませんでしたか？

オオトモ教授

そういう名前の患者は覚えがありません。

アリマ

カシオくんは患者じゃない。今日の夕方、十六年前の世界からやってきたんです。

オオトモ教授

十六年前から？ 一体何のために。

そこへ、ヒデトシ・先生がやってくる。

先生

あなたに会うためです。

アリマ

カシオくん！

ヒデトシ

オオトモ先生、先生は十六年前に、柿本はるかという患者の担当をした。覚えていますか？

オオトモ教授

覚えているとも。スキルス性ガンで、入院して一カ月で亡くなってしまった。幼い子供を三人も残して。さぞかし無念だったろう。

アリマ

あの時の男の子が、この子なんですよ。

オオトモ教授

そうか、君か。教えてください。今の医学なら、母の病気が治せますか？

ヒデトシ

おそらく無理だ。スキルス性ガンは、治療が非常に困難でね。今も世界中

オオトモ教授

の医学者が研究しているが、確実な治療法は発見されていない。しかも、

ヒデトシ

君のお母さんの病状はかなり進行していた。今の私でも、治すことはできないだろう。

ヒデトシ

でも、それは母が入院した時点での話ですよね？

アリマ

ヒデトシ

アリマ

ヒデトシ

オオトモ教授

ヒデトシ

オオトモ教授

ヒデトシ

オオトモ教授

そこへ、カシオ・スギエ・クリコがやってくる。

スギエ

カシオ

先生

アリマ

先生

タカスギ

どういうこと？

母が入院する一年前、病気になる前に行つて、ガンができる部分を取れば、健康な体にメスを入れて言うの？

(オオトモ教授に) お願いします。僕と一緒に、十七年前に行つて下さい。

カシオくん、それはできない。

先生！

君がお母さんを失いたくない気持ちにはわかる。私にとつても、自分が担当した患者だ。絶対に死なせたくなかつた。しかし、一度起きてしまったことを、元に戻すことはできない。

先生！

元に戻せないからこそ、必死で生きる。明日死ぬかもしれないから、今日という日を大切にする。それが人間というものなんじゃないかな。

カシオくん。

先生、何ボーツとしてるんですか。カメラを止めさせてください。撮るのはやめてください。

顔なら、後でモザイクで隠すわ。それでいいでしょう？

でも。

アリマさん、もうやめませんか。

アリマ  
タカスギ

何を言い出すのよ、タカスギくんまで。  
確かに、この子がしてることは、悪いことかもしれない。でも、別に誰かを傷つけてるわけじゃない。自分の母親を助けようとしてるだけなんですよ。

ヒデトシが走り出す。

クリコ お兄ちゃん！

ヒデトシの目の前に、課長・ヌカダが立ち塞がる。

課長 追いかけてっことはここまでだ。

カシオ・先生・ヒデトシ・ヤマノウエ・ヌカダ・課長がやってくる。

ヤマノウエ

サルマルさん、ありがとうございます。

課長

君に礼を言われる覚えはないが。

ヤマノウエ

あなたのおかげで、被害を最小限に食い止めることができた。私の首も飛ばされずに済みそうです。

課長

その判断はまだ早い。この子を尋問してからでないか。

カシオ

こいつは俺の家とテレビ局と病院にしか行ってない。二〇三五年のことは何もわかってせんよ。

課長

(ヒデトシに) 妹さんの身長は？

ヒデトシ

すぐでかくなつてた。

課長

(カシオに) ちゃんとわかつてるじゃないか。

先生

そんなこと知つても、何の得にもならないでしょう？

ヌカダ

(腕時計を見て) 課長、そろそろ出発しないと。

ヤマノウエ

(腕時計を見て) 午前一時。滞在時間は八時間か。

課長

(ヒデトシに) 八時間もかけて、結局、何もできずに帰るわけか。君の父親とは雲泥の差だな。

ヒデトシ

父さんも、未来に来たことがあるのか？

カシオ

父さんは過去へ行ったんだ。母さんをこの人から取り戻すために。その時、

課長  
カシオ  
課長

ヤマノウエ  
課長  
ヌカダ

ヒデトシがヌカダの手から機械を奪う。

ヌカダ  
ヤマノウエ

ヒデトシ

課長  
ヒデトシ  
課長  
ヒデトシ

父さんに与えられた時間は、たったの四十五分。でも、父さんは見事にや  
つてのけた。

あの時のことを思い出すと、今でも腸が煮えくり返る。

だったら、なぜすぐに仕返ししなかつたんです。

民間人のタイムトラベルが禁止されたんだ。おかげで、我々随行員の仕事

は百分の一になった。しかも、行き先は縄文時代とか弥生時代とか、大昔

ばかり。歴史改変などやりようがなかった。

今、歴史改変と言いましたか？

こつちの話だ。ヌカダくん、出発しよう。

じゃ、マシンをセットします。目標時間は、課長が出発した時間でいいで

すよね？（と機械を操作して）二〇一九年三月五日午後九時。

あ！ また！

（ヒデトシに）君、いい加減にしたまえ。この期に及んで、また罪を重ね

るつもりか。

僕は諦めない。父さんみたいにうまくはできないけど、絶対に最後までや

り通してみせる。

今度はどこへ行くつもりだ。

言ったら、また追いかけてくるだろう？

何度やっても同じだ。おまえにはるかさんは助けられない。

助けてみせる。

課長 無理だ。諦める。

ヒデトシ いやだ。

課長 まだわからないのか。おまえがしていることは、ただのワガママだ。一人

ヒデトシ よがりなんだ。

課長 それのどこがいけないんだ。

ヒデトシ 何だと？

先生 僕には、母さんがいなくなるなんて、考えられない。母さんが死んでも、

先生 この宇宙が変わりなく存在し続けるなんて、信じられない。母さんは宇宙

先生 より大切なんだ。

先生 でも、人にはやっつけていいことといけなことがある。

先生 先生。

先生 カシオくん、よく考えて。あなたがしてることを、お母さんは喜ぶと思う？

ヒデトシ ヒデトシが走り去る。後を追って、カシオも走り去る。と、二人が去った方向から、閃

光と爆風。先生・ヤマノウエ・ヌカダ・課長が倒れる。

そこへ、ヒデトシがやってくる。先生・ヤマノウエ・ヌカダ・課長が立ち上がる。ヒデ

トシの前を、次々と通りすぎる。スギエ・クリコ・アリマ・タカスギ・キド・オオトモ

教授もやっつけてきては通りすぎる。そこへ、カシオがやってくる。

カシオ 待てよ、ヒデ。

ヒデトシ 僕に行く。もつと先の未来へ。

カシオ そこでも、母さんの病気が治せなかったら。

ヒデトシ もつともつと先の未来へ。何度でも。母さんを助けられるまで。

カシオ  
ヒデトシ  
カシオ

そんなことをして、母さんが喜ぶと思うか？  
喜ぶに決まってるじゃないか。死なずに済んで、喜ばない人間がいるかよ。  
そうじゃなくて、今、おまえがしてることをだ。歴史改変は重大な犯罪な  
んだぞ。

ヒデトシ

僕は歴史を良くしようとしてるだけだ。

カシオ

良くなるとは限らない。

ヒデトシ

どうして。

カシオ

過去をほんの少し変えただけで、未来は大きく変わってしまう。死ぬはず

ヒデトシ

だった人間が死なずに済んだら、かわりに別の人間が死ぬかもしれない。

カシオ

いや、それどころか、もっと大きな災害が起きる可能性もある。

ヒデトシ

バカバカしい。災害なんか、起きるもんか。

カシオ

そうかもしれない。でも、万に一つでも可能性があるなら、母さんは反対

ヒデトシ

する。今のおまえを見たら、きつと止める。

カシオ

そんなことはない。

ヒデトシ

いや、絶対に止める。母さんは、自分さえ幸せになればそれでいいなん

カシオ

て、考える人じゃなかった。

ヒデトシ

でも、今やめたら、母さんは死ぬんだ。

カシオ

それは仕方ないことなんだ。そんなに早く死ぬなんて、ひどすぎるじ

ヒデトシ

やないか。

カシオ

ひどい人生だって言うのか。

ヒデトシ

普通の人の半分しか生きられないんだぞ。ひどいに決まってるじゃないか。

カシオ

俺は、そうは思わない。母さんは幸せだったと思う。

ヒデトシ  
カシオ  
ヒデトシ  
カシオ

幸せだった？  
証拠を見せてやるよ。マシンを貸してみろ。  
どこへ行くんだ。  
（ヒデトシの手から機械を取って）二〇一九年。母さんが幸せだった時代だ。

カシオ・ヒデトシが去る。そこへ、課長がやってくる。カシオたちの後を追って、去る。



はるかが携帯電話を持ってやってくる。椅子に座る。

はるか

(歌う)「カシオピア、もう水仙が咲き出すぞ、おまえのガラスの水車、きつきと回せ」

カシオ・ヒデトシがやってくる。

ヒデトシ

母さんだ。

カシオ

今日が何日か、わかるか？

ヒデトシ

たぶん、入院してすぐだと思うけど。

カシオ

三月五日の午後六時。おまえがタイムトラベルした、一時間後だ。

ヒデトシ

どうしてこんな所へ来たんだ。僕はもっと昔へ行くと思ってたのに。

カシオ

母さんが小学生の頃か？ それとも、父さんと結婚した直後か？

ヒデトシ

いつでもいい。病気になる前さ。

カシオ

母さんは死ぬまで幸せだった。病気になるって、入院してからも。

ヒデトシ

もういいよ。帰ろう。

カシオ

そう言うな。せっかく来たんだから、もう少し見ていこう。

オオトモがやってくる。

オオトモ  
はるか

柿本さん、こんな所にいると、風邪を引きますよ。  
主人の電話を待ってるんです。(と携帯電話を示して) 中で使うわけには  
行かないでしょう？

オオトモ

お家で何かあったんですか？

はるか

息子がいなくなっただんです。社会科見学で時間局へ行って、そのまま。

オオトモ

友達とどこかへ遊びに行っただんじょう。すぐに帰ってきますよ。

はるか

でも、最近、様子がおかしくて。

オオトモ

どんなふう？

はるか

前はやんちゃ坊主だったのに、私が入院してからはすっかり大人しくなっ  
ちやつて。この前なんか、「僕、大人になったら、医者になる」って。

オオトモ

母親思いのいい子じゃないですか。

はるか

私はうれしくありません。カシオはまだ十二です。可能性は無限にある。

オオトモ

自分の未来は自分のために選んでほしいんです。

はるか

なるほど。

オオトモ

でも、カシオが大人になった時には、私はこの世にいないですよね。

はるか

：：柿本さん。

オオトモ

でも、カシオとは十二年も一緒に過ごすことができました。いっぱい思い出を  
もらいました。

はるか

時間はまだたっぷりある。これからだって、思い出は作れますよ。だから、

はるか

あんまり心配しないで。  
わかりました。

オオトモが去る。

カシオ

よし、行くぞ。

ヒデトシ

え？ 未来の人間が、過去の人間に接触しているのかよ。

カシオ

おまえがそんなことを言える立場か。いいから、来い。

カシオとヒデトシがはるかに歩み寄る。

ヒデトシ

母さん。

はるか

カシオ。あなた、今までどこに行ってたの？

ヒデトシ

ごめん。

はるか

ごめんじゃわからないでしょう？ 先生やお父さんがどれだけ心配したと

カシオ

思ってるのよ。

はるか

あの、あなたは？

カシオ

カシオの友達です。あの、これ、良かったら。(とハンカチを差し出す)

はるか

すみません。でも、自分で持ってますから。(とポケットを探るが) いけ

カシオ

ない。病室に忘れてきちゃった。

はるか

じゃ、ぜひ。

カシオ

そうですか？ じゃ、お言葉に甘えて。(とハンカチを受け取り、目に当てて)

カシオ

……これ、後で洗って返しますから。

はるか

いや、結構です。差し上げます。そういうわけには行きません。

カシオ  
はるか  
カシオ  
はるか  
カシオ  
はるか  
ヒデオ

じゃ、カシオに渡してください。後でカシオから受け取りますから。  
失礼ですけど、お名前は？  
ナカタヒデオです。  
（笑って）それ、本名ですか？  
さあ、どうでしょう。  
カシオ、お母さん、病室へ戻るからね。あなたは早くお家へ帰りなさい。  
うん。

はるかが去る。

ヒデオシ  
カシオ  
ヒデオシ  
カシオ  
ヒデオシ  
カシオ  
ヒデオシ  
カシオ  
ヒデオシ  
カシオ  
ヒデオシ  
カシオ  
ヒデオシ

いいのかよ、あんなことして。  
ハンカチを貸しただけじゃないか。歴史改変にはならないよ。  
僕もハンカチを持ってくれば良かった。  
先生に言われただろう？ ポケットにハンカチ。紳士のたしなみだって。  
たしなみって、何？  
家に帰って、辞書を引け。  
わかった。  
ヒデオ、おまえに謝らなくちゃいけないことがある。  
何？  
俺はおまえを利用してた。おまえが十六年前の俺と同じように行動すれば、  
必ずここに辿り着く。それがわかっていたから、おまえを助けたんだ。  
ここにもう一度来たかったの？  
もう一度、母さんに会いたかった。会って、ハンカチを渡したかった。

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

ヒデトシ

カシオ

そこへ、課長がやってくる。

課長  
カシオ

課長

わかるよ、その気持ち。

よし。じゃ、おまえも十六年後に、またここへ来い。ハンカチを持って。

先生って、母さんに似てるね。

当たり前だ。そっくりに作ったんだから。

作った？

俺が勤めてる研究所は、H A L。ハリマ・アンドロイド・ラボラトリー。

俺の専門は、教師用アンドロイドの開発。先生は、今、開発中の、最新型

の音楽教師なんだ。名前は、はるか先生。

はるか先生。

母さんは三十九歳で死ぬかもしれない。でも、けっして不幸せじゃなかつ

た。父さんと結婚して、俺たちを産んで。幸せだったと、俺は信じる。

そうかな。

そうさ。

…：：：そうかな。(と俯く)

バカ。男のくせに、泣くな。(とヒデトシを叩く)

こら、子供を苛めるな。

苛めてませんよ。それに、こいつは俺なんだから、もし苛めたとしても、

誰にも迷惑はかからないわけで。

君に一つ忠告しておこう。そうやって屁理屈ばかり言っていると、一生結婚

できないぞ。私のように。

カシオ  
課長  
ヒデトシ  
課長  
カシオ  
ヒデトシ  
カシオ  
課長  
カシオ  
カシオ  
ヒデトシ  
カシオ  
課長  
カシオ  
ヒデトシ  
課長

肝に銘じておきます。

そうしたまえ。(ヒデトシに) マシンを返してもらおうか。

(課長に機械を差し出す)

(受け取って) もういいんだな？

はい。

サルマルさん、ありがとうございました。

君に礼を言われる覚えはないが。

あなたのおかげで、母に会うことができた。あなたがヒデを泳がせてくれたから。

何のことだ。

しらばっくれても、無駄ですよ。あなたには、ヒデをすぐに捕まえることができた。午後五時のちよつと前に来て、ヒデの到着を待っていれば。

あっ！

(課長に) しかも、あなたはヒデがしたことを揉み消してくれる。元の時

代に帰った後、マシンの記録を消去してくれる。

随行課の課長がそんなことをすると思うか？

思います。

でも、どうして？

君が柿本光介の息子だからだ。どこまでできるか、見てみたかった。それ

だけのことさ。

アリマ・タカスギがやってくる。

アリマ

結局、私は最後まで悪役ってわけ？

タカスギ

いや、ジャーナリストとしては、非常に立派だったと思いますよ。

アリマ

私だって、辛かったのよ。だって、相手は柿本さんの息子じゃない。三十年も憧れてきた人に、嫌われるかもしれないのよ。

タカスギ

憧れてたんですか、柿本さんに。それでいまだに独身なんですか？

アリマ

うるさい！

反対側から、キドがやってくる。

キド

良かった。間に合った。

タカスギ

全然間に合ってませんよ。今までどこに行ってたんですか。

キド

病院の名前がわからなくて、この辺りの病院を片っ端から探し回ってたの。もうくたくた。

タカスギ

そのわりに、ご機嫌ですね。

キド

わかる？ 私ね、子供の頃から好きだった人と、やっと話ができたの。何

だか、恋が始まりそうな予感。

アリマ　私はただの気のせいだと思う。さあ、これから六本木で反省会よ。朝まで。

アリマ・タカスギ・キドが去る。  
別の場所に、先生が望遠鏡を持ってやってくる。

先生　（歌う）「アンドロメダ、あぜみの花がもう咲くぞ、おまえのランプのアルコオル、しゅうしゅと噴かせ」

そこへ、ヒデトシがやってくる。

ヒデトシ

ただいま。

お帰りなさい。無事だったのね？　良かった。カシオくんにも、ずっとそばにいろって言われたのに、ついていけなかったじゃない？　だから、とても心配だったの。

ヒデトシ

ずっとそばにいろって言われたの？

先生

そうよ。それが、私の勉強になるからって。

ヒデトシ

先生に頼みがあるんだ。

先生

私に？　何？

僕が汗を拭いたハンカチ、くれないかな？　やっぱり、洗って返そうかと思ってる。

先生

そんなの気にしなくていいのよ。

ヒデトシ

ほしいんだ、あのハンカチが。そのために、ここへ戻ってきたんだ。

先生

わかった。（とカシオにハンカチを差し出して）どうぞ。



ヒデトシ

先生

(受け取って) ありがとう。先生の名前、はるかかって言うんだろ？  
はるかじゃなくて、はるか先生。あなたのお母さんみたいな先生になれる  
といいんだけど。

ヒデトシ

先生

なれるよ。もうなってるよ。  
そう。

ヒデトシ

先生

でも、僕はなれなかった。ペルセウスに。  
なれるよ。もうなってるよ。

先生・ヒデトシが去る。

別の場所に、カシオ・スギエ・クリコがやってくる。

スギエ

カシオ

スギエ

クリコ

スギエ

カシオくんは？

先生に挨拶に行った。姉さん、それ、何？

お土産。ハンバーグと春巻と栗きんとんをお重に詰めたの。

(カシオに) 自分の手料理を、どうしても食べさせたんだって。

十六年前より、大分腕が上がったからね。お母さんの味にかなり近づいた  
と思うのよ。

残念だけど、タイムマシンは手荷物禁止だよ。

え？ どうしてそれを先に言ってくれないの？

カシオ

スギエ

チャイムの音。

カシオ

何ですか、ヌカダさん？

ヌカダの声  
五分だけって約束のはずですが。  
カシオ わかってますよ。今、行きますから。

そこへ、先生・ヒデトシがやってくる。

先生 お待たせしました。  
カシオ (ヒデトシに)ヌカダさんがお待ちかねだ。もう行った方がいい。

扉が開く。ヌカダ・課長が立っている。

スギエ これ、お土産にと思って、用意したんだけど。  
クリコ (ヒデトシに)ポケットに入る分だけ、持っていけば？ どうせ空っぽな

ヒデトシ んでしょ？  
いいえ、もういっぱいです。カシオペアの歌や、ペルセウスの話や、みんなにもらったたくさんの言葉で。

カシオ 諦めなよ、姉さん。

スギエ でも、せっかく作ったのに。  
ヒデトシ (栗きんとんを指で掬って舐めて)うまい。これ、母さんが作るのと同じ

スギエ 味だ。  
それよ。その言葉が聞きたかったのよ。

先生 (ヒデトシに)それじゃ、さよなら。  
クリコ さよなら、お兄ちゃん。  
スギエ さよなら、カシオ。

ヒデトシ

さよなら。

カシオ

あ、一つ言い忘れてた。十六年前に戻ったら、姉さんとクリコを頼むぞ。

ヒデトシ

おまえは男なんだから、二人をしっかりと支えるんだ。

カシオ

わかった。

ヒデトシ

それから、父さんのことも頼む。父さんは母さんにベタボレだからな。母さんが亡くなった後、廃人みたいになるんだ。とにかく、最初の一年は、おまえが柿本家を支えないと。

カシオ

一年？  
そうだ。一年経ったら、柿本家の冬は終わる。春をもたらししてくれる人がやってくるんだ。

カシオ・スギエ・クリコが空を見上げる。遠くに、おばあちゃんの姿が浮かび上がる。

カシオ

それから。

ヌカダ

一つつて言っておいて、いくつ話すつもりです。

カシオ

最後にあと一つだけ。(ヒデトシに) 北斗七星の七つの星の名前を覚えて

課長

おけ。後できつと役に立つ。

カシオ

さあ、カシオ。

カシオが右手を差し出す。ヒデトシがその手を右手で握る。

へ 幕 へ